HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	道立北方民族博物館所蔵の服部健博士旧蔵資料について
Author(s)	笹倉, いる美
Description	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
Relation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed.
Citation	サハリンの言語世界 : 北大文学研究科公開シンポジウム報告書, 41-48
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38297
Type	conference paper
File Information	04sasakura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サハリンの言語世界（津曲敏郎編，北海道大学大学院文学研究科，2009: 41–48）

道立北方民族博物館所蔵の服部健博士旧蔵資料について

笹 倉　い る 美
（北海道立北方民族博物館）

はじめに

ここに報告するのは、北海道立北方民族博物館（以下北方民族博物館）の所蔵に帰した、言語学者服部健博士旧蔵資料の概要である。北方民族博物館ではこの旧蔵資料を「服部文庫」と呼んでいる。シンポジウムでは、音楽家の篠原智花さんとの共同発表だったが、本報告書では筆者の担当部分を報告する。本報告中の写真 3〜7 は服部文庫のものである。

写 真 1

報告者は網走市にある北方民族博物館の学芸員をしている。普段は博物館の裏で展示の企画をしたり、教育普及事業の運営をしたりしているが、収蔵庫で資料の整理をするということもある。そういう博物館資料をどうやって博物館に登録するのかというようなことが研究テーマの一つになっている。例えば写真 1 のような資料が博物館に到着したとして、資料名をどうするかというようなことを考える。毎年博物館に実習にくる学生さんへの講義では、これに資料名をつけてもらうというのを恒例のことにしているが、シロクマとかホッキョクグマとかぬいぐるみとか、さまざまな名称が挙げられる。けれどもそのようにばらばらだと、検索するのには非常に厄介なため博物館では規則を定めて登録している。展示をするときは、その展示に適った資料名にしてよいことにしている。そうした規則は博物館ごとに違っているが、北方民族博物館では登録資料名に使える用語が決まっているため、目当てのものを探すのは割合と簡単になっている。

写 真 2

ところがなかなか整理がすすまないのが、これから紹介する服部博士の旧蔵資料で、それは大量にあること、内容が非常に多岐にわたっていることと、特にさまざまな言語が使われていることなどが原因になっている。

写 真 3

服部健博士について

さて、服部健博士はニブフ語の研究者であったが、蔵書家としても知られていた。写真 2 はその一部である。なお、これらの図書についてはほとんど整理がおわり、すでに目録を発行している。

日本に数冊しかないという本をお持ちだったり、また現在のような簡便なコピー機がない時代に、外国の図書館に依頼して、複写を取り寄せたり、またご自分でも文献の撮影をされてもいた。このほか数多くの抜き刷り類などもあり、またご自身がお書きになったノート、単語カード、また音声記録ほか、さまざまな言語関係資料をお持ちだった。そしてお亡くなりになった後、ご遺族である夫人の登喜子氏より、服部博士の旧蔵資料は一括して、北方民族博物館に寄贈された。平成 6（1994）年に寄贈の手続きをしている。

平成 3（1991）年に開館したばかりの博物館に、そのような貴重な資料が寄贈された経緯には、池上二良先生からのご紹介があり、ご遺族並びに池上先生に深く感謝申し上げたい。

服部博士は前述のように言語学者である。ニブフ語（博士自身はギリヤーク語という言葉を多くつかっておられたが）研究者として著名である。写真 3 の後列右側の方が服部博士で、これは 33 歳ころの写真になる。

服部博士は明治 42（1909）年福岡市のお生まれ。昭和 8（1933）年上智大学文学部独逸文学科を卒業されている。ここで服部博士は人類学者の鳥居龍藏氏の指導を受ける。この辺りはドイツ文学科卒といいながらも、サハリンの少数民族のことに興味をもってゆくことになる契機であったのではないかと考えている。昭和 37（1962）年京都大学から文学博士の学位を授与される。平成 3（1991）年に逝去。

職歴には北海道帝国大学（北海道大学）、北海道庁立女子医学専門学校（札幌医科大学の前身）、北海道学芸大学（現北海道教育大学）、東京電機大学などがある。

池上先生によると、服部博士は、四国の長宗我部元親を先祖にする香宗我部家にお生まれとのことである。この服部博士のお育ちのよさというのは、服部博士について語られるときにしばしば耳にする言葉でもある。文献を取り寄せるにあたっては、通信手段からして苦労をし、おそらくは経費も相当かけたであろうと思われる文献を、乞われる方たちに快く貸し出されたということも、お育ちのよさがあったからのように考えている。

服部博士が発表されたものは、そのほとんどを平成 12（2000）年に発行された『服部健著作集』で読むことができる。この著作集の発行は、千葉大学名誉教授の金子亨先生をはじめ大勢の方々のご尽力があってのこととときいている。

この著作集には博士論文も所収されており、書き込みのあった頁を数十頁にわたって掲載している。これは服部博士が、発表後も校正、推敲をつづけているという証しであり、

（左）写 真 4　　（右）写 真 5

こうした自作への書き込みは博士論文以外にも多く残されている。服部博士の研究姿勢の一端を示す例ではないかと思う。

さて、服部博士の研究テーマはギリヤーク語（ニブフ語）であった。しかし、昭和 12（1937）年にはじめて樺太へ行ったときにはニブフ語ではなくウイルタ語を研究するおつもりだったようだ。それが樺太にゆき、また当時アイヌをのぞく少数民族が集住していた敷香（現在のポロナイスク）郊外のオタスへ行き、すでに澗潟久治氏がウイルタ語を研究されていたことを知り、また同地にあった教育所の教員である川村秀弥氏にニブフ語研究をすすめられたという経緯がある。写真 4 の中央が川村秀弥氏である。こうしてニブフ語の研究がはじまることとなる。このとき服部博士は 28 歳であった。

このあと服部博士は少しユニークな調査方法をとる。それはオタスからニブフの調査協力者を自宅のすぐ近くに呼び寄せ、住まわせてしまおうということである。

以下に服部博士の調査について簡単に紹介する

(1)　昭和 12（1937）年 7 月 17 日～樺太調査①　これが第一回目である。

写真 5 は、オタスを、おそらく船から撮影されたものではないかと思う。敷香の街からオタスへは船に乗って川を渡って行った。右端にみえるのが敷香教育所。この先右手にニブフの集落が、学校をはさんで左手のほうにウイルタの集落があった。

またこの年の 8 月 11 日発行の読売新聞には、「オタスの杜の興味ある研究」というタイトルの記事が掲載され、「北大理学部国語講師服部健氏は 7 月下旬以来約二週間に亘り樺太北端のオタスの杜に踏み入りギリヤーク、オロッコ族の言語に関する研究を遂げたが帰路豊原に立ち寄り次ぎのような興味ある談話を残した」ということが書かれている。豊原というのは、現在のユジノサハリンスクのことである。

(2)　昭和 13（1938）年夏（8 月）　樺太調査②

この時にはアイヌの集落も訪ねている。

(3)　昭和 16（1941）年 2 月 28 日～6 月 5 日

札幌調査　札幌市に呼んだニブフ女性二名と子二名

（左）写 真 ６　（右）写 真 ７

各所と折衝し、ようやくにしてニブフの方たちを札幌に呼ぶことができた。

(4)　昭和 16（1941）年 9 月 7 日

網走調査　網走に海獣狩猟にきていたニブフ男性三名

写真 6 は網走にある木村写真館で撮影されたものである。この写真館はいまも網走で営業している。この三名のうちのお一人が、前にきていたニブフ女性の夫であった。

(5)　昭和 16（1941）年 10 月 28 日～11 月 12 日　樺太調査③

(6)　昭和 16（1941）年 12 月末～昭和 17（1942）年 4 月上旬

札幌調査　札幌市に呼んだニブフ一家（写真 7)。服部博士のまわりがこのニブフの一家である。

(7)　昭和 17（1942）年 7 月下旬　助手の樺太調査

この助手という方の名前はいまのところわかっていない。

(8)　昭和 17 年（1943）年 8 月 10 日～

札幌調査

札幌市に呼んだニブフ女性と子、ウイルタ女性

・昭和 17（1942）年 11 月　　ウイルタ女性は帰郷

・昭和 18（1943）年 1 月～10 月　ニブフ女性の夫が子とともに来札

(9)　昭和 18 年（1943）年 7 月下旬　助手の樺太調査

また、樺太の少数民族の言語とアイヌ語以外に、服部博士が北海道で調査した言語がある。それはアリュート語で、調査地は小樽であった。小樽には第二次世界大戦中にアリューシャン列島のアッツ島から移住させられたアリュートの人たちがいた。そして服部博士はこの人たちの言語調査をしている。ただ、このことについて服部博士ご自身は全くと言ってよいほど発表をされていない。

杉浦正己氏がお書きになった、『一枚の写真を追ってアリューシャンを行く』という本

の一節に、アリュート人の言語調査という項目があり、服部博士が登場する。

小樽での抑留生活にようやく慣れてきたアリュート人は、故郷アッツ島で日本軍が玉砕したことなど気づかなかった。もちろん、チチャゴフ村のアリュート人の家が、銭湯によって破壊されたことなど、少しも知らなかったのである。

その年（昭和 18（1943）年　報告者註）、夏から秋にかけての三週間、小樽市若竹町のアリュート人収容所に、少壮の大学講師が出向いて言語調査を行っていた。この人は、北海道帝国大学理学部で語学を教えていた服部健さんである。1909（明治 42）年生まれの服部さんは、当時 33 歳であった。

「わたしのことがよくわかりましたね。戦争中のことで、警察の方から小樽にアリュートがいることは公言してはならぬと注意を受けていました。しかし、あれから 40 数年が過ぎました。お役に立つかどうかわかりませんが、あなたにお話いたしましょう」と服部健さんが話してくれた。

戦時中、服部さんは、シベリア東部や樺太北部に住む北方民族・ギリヤークの言語を主に研究していた（原文ママ）。アリューシャン列島に住むアリュート人が小樽に来たことを知り、昭和 18 年 8 月から 9 月初旬と 11 月、日曜日を除き毎日四時間にわたって調査をはじめた。当時は語学学習に便利なカセットテープがあるわけでない。服部さんは鉛筆とわら半紙を使って、マイク・ロカーニンさんに英語で質問し、アリュート語を教えてもらった。（杉山 1987:155-159）

この時のわら半紙やノートの一部が写真 8 のように残っている。

また、もう一冊、服部博士が登場する一般書がある。木部与巴仁氏のお書きになった『伊福部昭：音楽家の誕生』というのがそのタイトルである。伊福部昭氏という作曲家がいたが、伊福部氏の作品には、「ギリヤーク族の古き吟誦歌」、「サハリン島先住民の三つの揺籃歌」というものがある。服部博士の昭和 19（1944）年の著作『東亜民族要誌資料第一輯　ギリヤーク』（帝国学士院東亜諸民族調査室発行）のなかに、14　芸術・娯楽・物語　という項があり、これに楽譜も掲載されている。この楽譜については、「（伊福部氏による）」という断り書きがついている。お二人の関係は、服部博士は、音楽家である伊福部氏に、ニブフの音楽の楽譜づくりや専門的な分析を依頼し、伊福部氏は、ニブフの音楽から作曲の着想を得るというようなことだったようだ。

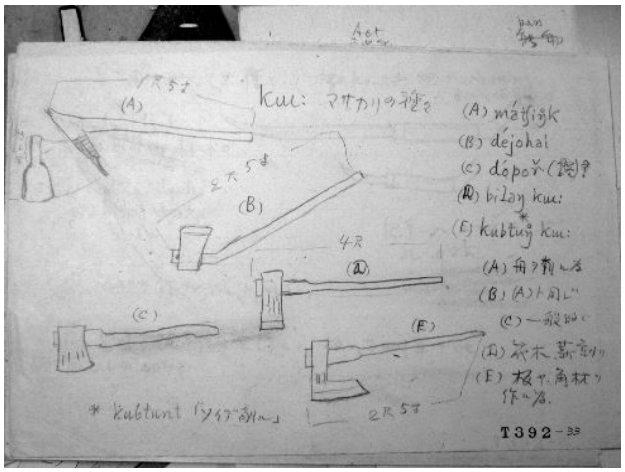
服部文庫の整理と公開

前述のとおり服部文庫には、書籍、フィールドノート、抜き刷り、写真、マイクロフィルム、書簡、単語カード、音声記録などが含まれている。

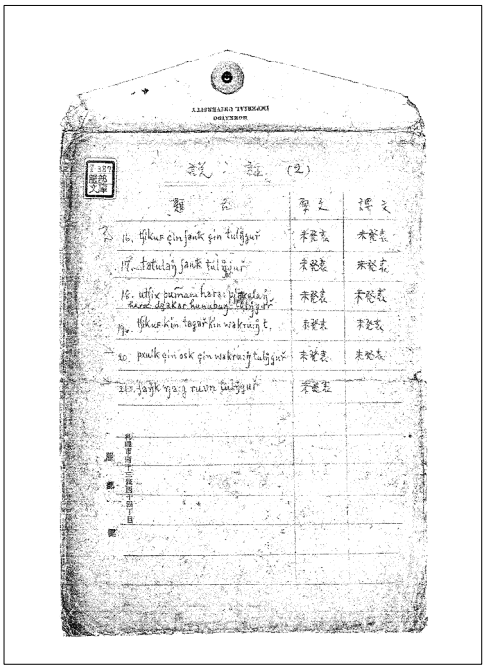
服部氏は、関連するものごとを封筒で管理するということをされていたようだ。例えば T392 と番号をつけた袋のなかには、写真 9 でみられるようなものがはいっている。写真 10 でみるように、服部氏は絵がとてもお得意だったようだ。そしてこうした袋が全部で 700 袋くらいあり、北方民族博物館では写真 11 のような形で保管している。もちろん中には言語学とは全く関係のない袋というものもある。

写 真 8

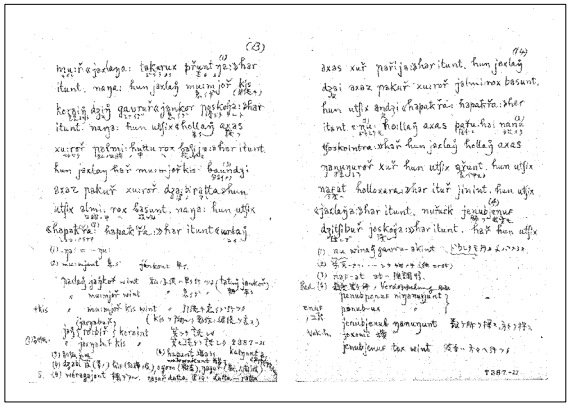
写 真 9



（上）写 真 10　　（右）写 真 11



写 真 12



写 真 13

さて、細かいリスト化は別にして、重要そうなものは、長期保管に耐えるよう一部をマイクロフィルム化し、それをさらにCD-ROMにして扱いやすくしてある（写真12,13）。

服部博士は基本的に鉛筆を使用されておられた。これが幸いして、記録類のほとんどはいまでも読むことができる。電子メディアは今後どのように劣化するかまだわかっていないことが多いため、マイクロフィルムでも保管することを採用した。

服部文庫はその一部を整理し、次のように公開している。

(1)『北海道立北方民族博物館資料目録6 服部文庫目録』（北海道立北方民族博物館、2002）

(2)服部文庫公開シリーズ1

山口和彦、井筒勝信編 2004「ニブフ語（ポロナイスク方言）基礎語彙」『北海道立北方民族博物館研究紀要』13:23-35

(3)服部文庫公開シリーズ2

山口和彦、井筒勝信編 2004「ニブフ語（ポロナイスク方言）英語語彙資料」『北海道立北方民族博物館研究紀要』13:36-58

（山口和彦、井筒和信編　2005「ニブフ語（ポロナイスク方言）英語語彙資料補遺・正誤一覧」『北海道立北方民族博物館研究紀要』14:143-146

(4)服部文庫公開シリーズ3

笹倉いる美編　2005　「服部健『樺太旅行記　昭和 12 年』、附：日本学術振興会宛て報告書下書き」『北海道立北方民族博物館研究紀要』14:105-126

(5)服部文庫公開シリーズ4

白石英才、笹倉いる美　2007　「ニブフ（ギリヤーク）の縫い方」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16:69-76

また、直接服部博士の資料を紹介するものではないが、渡部みち子氏が北方民族博物館の紀要9号（2000年）に「19世紀中頃のニブフ語資料－le P. Furet収集（1856）のニブフ語彙」というタイトルで、服部文庫の一冊を整理・分析されている。

さて、生前、ご自身の著作集を出すにも、慎重なご性格のため、ためらわれていたという先生の草稿などを公開するのはいかがなものなのか、というご意見もあるかもしれない。博物館の資料は、基本的には公開されることが前提になっているし、活用を願っての寄贈であった。また、現実的に服部文庫を利用されるのが、一般の方というのはまず考えづらく、殆どが専門家であることから、不適切な使用というのはあまり想定していない。「ツングース言語文化論集」にならって、通し番号をつけているのも、一応博物館の目のとどくようにということも考えているためである。

服部博士が残された資料類は、一見してサハリンの言語研究に貴重なものであることは疑いがない。報告者の仕事としては、大勢にこの服部文庫を利用しやすくすることであり、ぜひ活用いただければと願っている。

参考文献

服部健 (2000)『服部健著作集：ギリヤーク研究論集』北海道出版企画センター

木部与巴仁 (1997)『伊福部昭：音楽家の誕生』新潮社

杉山正己 (1987)『一枚の写真を追ってアリューシャンを行く』杉山書店

Dr. Takeshi Hattori's Materials (*Hattori Bunko*) Stored in Hokkaido Museum of Northern Peoples

Irumi SASAKURA
(Hokkaido Museum of Northern Peoples)

Dr. Takeshi Hattori (1909-1991) was a linguist on the Nivkh (Gilyak) language. Before the end of World War Ⅱ, the southern part of Sakhalin island (south of latitude 50 degrees north) was the Japanese territory. The indigenous peoples such as Nivkh, Uilta and others, except Ainu, mostly lived in Otasu located in the suburbs of Shisuka (now Poronaisk). Dr. Hattori went to Otasu and made fieldworks. He also invited Nivkh informants to Sapporo where he lived.

In 1994, a collection of Dr. Hattori's Materials (books, notebooks, recording tapes, microfilms, and photos) was contributed to the Hokkaido Museum of Northern Peoples. We call it *Hattori Bunko*.

This paper will present the outline of the collection which shows some aspects of his research in the Nivkh language.